



バルセロナとミュンヘンの建築を訪ねて (その1・バルセロナ)

お茶の水女子大学名誉教授 田中辰明

はじめに

(一社)日本断熱住宅技術協会¹⁾(平田恒一郎会長)はナイス㈱と共同で2017年1月13日~18日の間スペインのバルセロナ、ドイツのミュンヘンで研修会を行った。筆者もこの研修会に参加したので報告を行う。

1. バルセロナへの飛行

2017年1月13日羽田空港で結団式を行い、12時45分発の全日空機でミュンヘンへ向かった。飛行機は順調に飛行し定刻の現地時間17時にミュンヘン空港に到着した。時差があるので約11時間の飛行ということになる。予告もされていたが、南ドイツ地方は寒波の襲来があった。19時20分にミュンヘンを出てバルセロナに向かうはずの接続機、LH816便はミュンヘン空港への到着が遅れたうえ主翼に雪が付着しその除去作業のため出発が2時間遅れた。「LHはLuft Hansaの略ではなく、Late Hansaの略であろう」などと長旅の疲れに悪口を言う人も現れた。しかしミュンヘン空港、この接続便を待つ待合室にもVitra社²⁾の家具(写真1、2)や時計(写真3)が設置されていた。これらはおそらくVitra社が宣伝を兼ねて空港会社に提供しているものであろうが、実際に使用できるようになっており、長い待ち時間となったが、



写真1 ミュンヘン空港に設置されているVitra社の椅子



写真2 ミュンヘン空港に設置されているVitra社の椅子



写真3 ミュンヘン空港に設置されているVitra社の時計

作品を鑑賞することができ、接続便を待つ一行の不満も和らいだようである。

2. バルセロナ視察

1月14日にバルセロナの視察を行った。幸いに天候に恵まれた。

バルセロナはスペインのカタルーニャ地方の州都である。カタルーニャは中世においては独立国家であった。スペインの首都マドリッドと異なり、地中海に面し良港を持つ。したがって中南米にあったスペイン領の国々との交易で財を成し、マドリッドとは反目しあった関係で



写真4 バルセロナの大聖堂

あった。言葉もマドリッドと異なり、カタルーニャ語といわれる。

最初に向かったのがアントニオ・ガウディ(1852~1926)設計で未だ完成していないサグラダ・ファミリア(聖家族)であった。ガウディやサグラダ・ファミリアについて筆者が早稲田の建築学科学生であったころ、今井兼次先生並びに後任の池原義郎先生から何度も伺った。今井先生はガウディを日本に最初に紹介し、かつ信奉者であった。自らの建築作品に多数ガウディの手法を用いている。

ガウディが生まれたのは人口25万人の州都バルセロナの南方110kmにあるレウスという町であった。父親は金属加工職人で決して裕福な家系ではなかった。スペインでは当時建築家は特権階級に属しており、とても職人の息子がなれる職業ではなかった。ガウディはレウスからバルセロナに出て、苦学をしながら建築学校の予科に通い、建築学校の本科に入学したのは21歳であった。この建築学校はエリート校でガウディとともに卒業した学生は4人であった。ガウディ31歳の時にサグラダ・ファミリアの設計陣に入る。サグラダ・ファミリアは1882年に起工されたが、当初はビリヤールという建築家が担

当をしていた。しかしビリヤールは発注者と意見対立があり、辞任し、その後を継いだのがアントニオ・ガウディであった。

欧洲の大きな都市には必ず大聖堂がある。バルセロナにも1259年に着工され、15世紀にほぼ完成した大聖堂(写真4)がある。ロマネスクの上にゴシック建築が乗つかったように見える。このファサードは19世紀に作られたものである。これは建築学校で5年先輩のマルトゥレイの作品であるが、マルトゥレイの建築事務所に一時勤務していたアントニオ・ガウディが図面を引いた。マルトゥレイがガウディの才能を認め、ビリヤールの後任にサグラダ・ファミリアの設計者として推薦したのである。バルセロナの大聖堂は格式が高く、産業革命などで財をなした金持ちが威儀を正して礼拝の為訪問する教会であった。ガウディは一般大衆が礼拝しやすいようにと誰にも親しみやすい教会を設計しようと心掛けた。

大きな仕事をする建築家はパトロンを必要とする。バルセロナには奴隸貿易で巨額の富を築いた先祖の遺産を引き継いだアウゼビ・グエルという富豪の実業家がいた。ガウディは1878年にパリで開催された万国博にスペインのクメリヤ手袋店の依頼によりショーケースを設計し

ていた。このショーケースがグエルの目に留まり、グエルがガウディに仕事を発注するようになる。当初は家具の発注程度であったが、後にグエル別邸、グエル自邸、グエル公園などに発注が広がっていく。アントニオ・ガウディは富豪のパトロンがつくことにより、自由に設計ができる建築芸術家としての地位が保証された。

3. サグラダ・ファミリア

ガウディは31歳でサグラダ・ファミリアの設計に着手し、1926年6月にバルセロナの路面電車にはねられ、亡くなる迄サグラダ・ファミリアの設計に従事していた。亡くなった時点で全体の1割が完成していた。そして現在も工事は進められている。この建設は壮大なロマンである。教会が信者から寄付金を集めて工事が行われたが、工事の進捗は寄付金の集まり方次第であった。ガウディも工事に対する注文が多く、遅々として進捗しなかったこともある。しかしガウディとその作品は人気を呼び、現在では世界から観光客が続々とバルセロナに押し寄せている。表1にスペインなどの国民1名あたりの国民総生産比較を示す。スペインはEUの中で日々経済破たんが取りざたされる。こういう中にあってサグラダ・ファミリアは確実に外貨を稼ぐ役割を果たしている。また「いつ竣工するのだ?」という疑問に対し「それは神の思し召し次第」すなわち寄付金の集まり次第ということであるが、最近は世界から寄付金が集まっているそうである。

日本で最初にガウディの作品に注目し研究を行い紹介したのは前述どおり早稲田大学建築学科教授であった今井兼次先生であった。今井先生は現在の営団地下鉄の駅(銀座線)の設計をされ、駅舎の勉強に1926年に欧州視察旅行を行っている。しかし主目的はガウディの作品を見学し、ガウディに面会することであった。実際当時バルセロナには地下鉄があったそうである。しかし残念な

表1 いくつかの国の国民1名あたりの2015年国民総生産。
Der Neue Fischer Weltalmanach2017より作成

	人口	国土面積	一人当たり GNP
日本	126,958,000	377,837	36,680
ドイツ	81,413,000	357,376	45,790
スペイン	46,418,000	504,645	28,520
米国	321,419,000	9,809,155	54,960
英国	65,138,000	242,910	43,340
中国	1,379,113,000	9,572,419	7,820
韓国	50,617,000	99,313	27,440

GNPはUS\$ (2015年) 国土面積はkm²

ことにバルセロナに到着するほんの少し前にガウディは事故死し、面会はならなかった。ガウディの研究は池原義郎教授、入江正之教授に引き継がれている。入江教授も2017年3月で退職され、この研究はさらに山村健講師に受け継がれる。

しかしこれほど有名なガウディも近代建築史の研究家からはほとんど無視されていた。例えば彰国社が出版した建築学体系6「近代建築史」は当時近代建築、現代建築を学ぶ為のバイブルとも呼ばれた名著であった。主に東大建築学科出身の建築史学者山本学治、神代雄一郎の両先生により著されている。しかしガウディに関する記述は殆どなく僅か1行程度の解説であった。当時はブルーノ・タウト、グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、コルビジェといった装飾のない単純で、工業化に適した建築が評価され、日本の建築界もその方向で統一されていこうとした時代であった。そこへアントニオ・ガウディが現れ、時代に逆行する作品を発表するようになった。それを日本に紹介したのが今井兼次先生であった。おそらく当時の建築界では今井先生はかなりのバッシングに会われたのではないかと想像する。したがってガウディ建築の紹介は早稲田大学の建築学科の中に留まつたのでないだろうか?

作品の面からみるとやはり早稲田大学の建築学科出身の梵寿綱³⁾という建築家がいる。また、今井兼次先生は早稲田大学図書館や演劇博物館の設計者として有名であるが、ガウディの作品を訪問した後は大多喜町役場、長崎の26人聖人記念館(1962年)の作品がある。この記念館は豊臣秀吉の時代に6名の外国人宣教師と20名の日本人信者がキリスト教の犠牲となり、彼らに祈りを捧げる為に建設された記念館である。ブロンズの聖人像越しに2本の有田焼のモザイクタイル張りの尖塔を設けている。これはバルセロナのガウディ建築を彷彿させるものである。同じく今井先生は皇居にモザイクタイルの建築を残している。「桃華楽堂」(1966年)である。

写真5にサグラダ・ファミリアの全貌を示す。工事用のクレーンも一緒に写っているが、この面が誕生のファッサードと呼ばれている。前面には3つの門がある。それぞれ希望の門、慈愛の門、信仰の門と呼ばれている。4本の鐘楼が天に向かって聳えているが右から左へ向かい「マタイの塔」、「ダダイのユダの塔」、「シモンの塔」、「ペルナベの塔」と呼ばれている。誕生のファッサードではイエス・キリストの誕生から少年期に至る成長の過程が彫刻になっている。写真5の中央クレーンの下にあるの



写真5 前面の池に影を落とすサグラダ・ファミリア

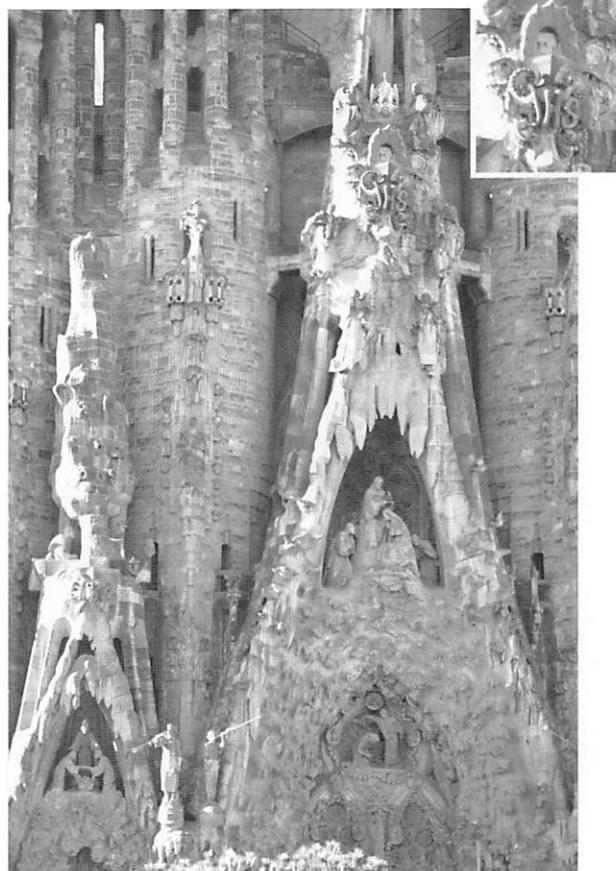


写真6 サグラダ・ファミリア。誕生のファッサード



写真7 誕生のファッサードにあるイエス・キリスト誕生を告げるラッパを吹く天子像

が「生命の樹木」と呼ばれ、糸杉を表している。糸杉はギリシア神話の女神アルテミス(Artemis)の聖樹(神木)とされるほか、キリストが磔(はりつけ)にされた十字架の材料として使われたという伝説も残されている。写真5の一部を拡大した写真6の上部のやや右に“JHS”的文字が見える。これは救世主イエス・キリストを表している。また同じく写真6のJHSの文字の下にある彫刻はマリアに冠を捧げるイエス・キリストを表している。しかしイエス・キリストの表情は我々が想像するものとは異なっている。これはガウディが実際にそこにいた彫刻師などの顔かをキリストの顔にしてしまった為であるといわれている。このような手法は今井兼次先生にも受け継がれた。大多喜町役場では町の住人に実際に使用している陶器の食器を持ってさせ、それを外壁にはめ込んでいっている。そのことにより大多喜町の住人は町役場に愛着が持てたのである。写真7も誕生のファッサードであるが、上部にイエスの誕生を告知するラッパを吹く天子像がみられる。天子像の右下がいわゆる受胎告知⁴⁾の

像である。このようにキリスト生誕から成長の話が彫刻として納められている。誕生のファッサードには3つの門があり、「誕生の門」と呼ばれている。中央の門は「慈愛の門」、外部から向かって右の門は「信仰の門」、左は「希望の門」と呼ばれている。中央の「慈愛の門」を写真8に示す。教会の天井はガウディの弟子や孫弟子により完成



写真8 「慈愛の門」

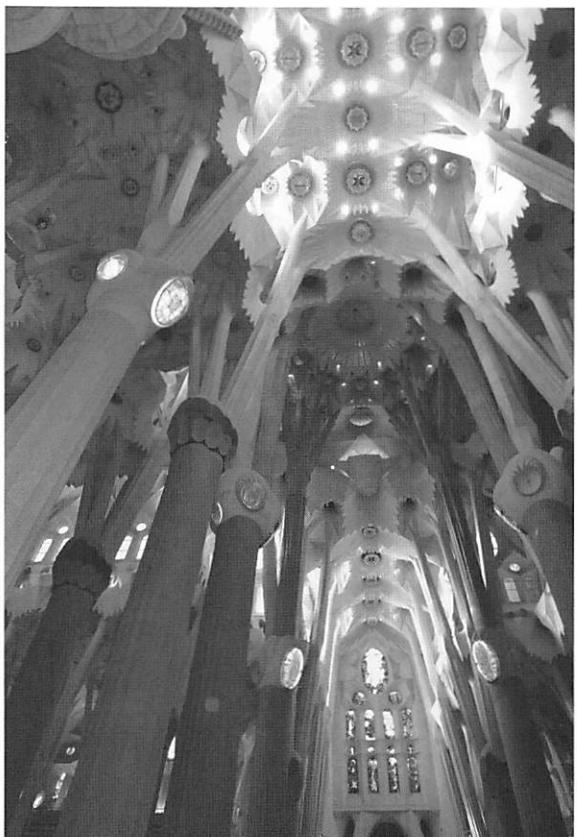


写真9 サグラダ・ファミリア教会の天井

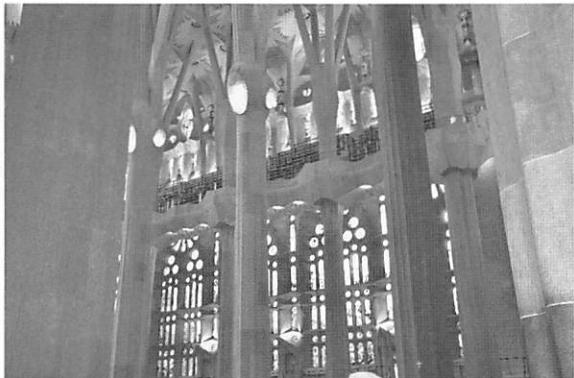


写真10 サグラダ・ファミリア教会のステンドグラス

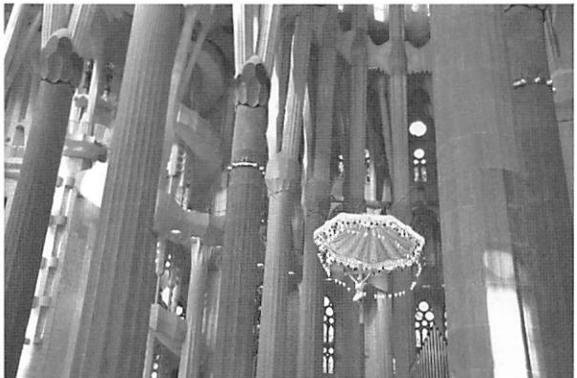


写真11 サグラダ・ファミリア教会の天井を支える柱

された。天井高さは60mある。天井からは光が教会内に差し込むようにトップライトが設けられ、外壁面は美しい3原色を重ねたステンドグラスが使用されている(写真9、写真10)。天井は写真11を見るように大きな柱で支えられている。晩年は仕事場のサグラダ・ファミリアで生活をしていたアントニオ・ガウディは市電にはねられ、不慮の死に至ったがローマ法王の許しを得てサグラダ・ファミリア教会内に埋葬された(写真12)。



写真12 アントニオ・ガウディのマスク彫刻

4. カサ・ミラ

バルセロナのパッセイジ・デ・グラシア通りに建つ高級住宅である(写真13)。ガウディ晩年の作品でガウディの完成作品と言われている。オーナーであるミラ家の住宅と集合住宅からなる。ミラ家の住宅は1600m²、賃貸用住宅も1戸が400m²ある。ファッサードは波打つ形状で、これは石を積み上げ、さらに石工により丁寧に曲線の加工を施して仕上げたものである。図1にカサ・ミラを示す。

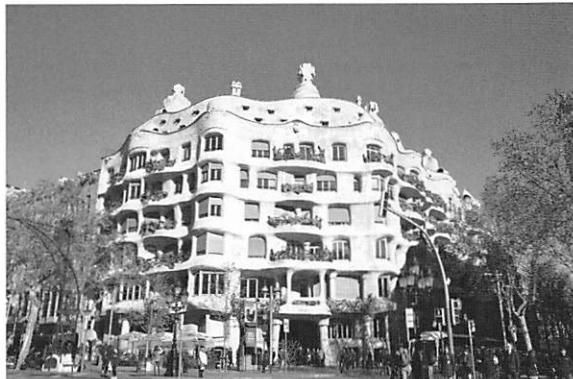


写真13 高級住宅カサ・ミラ

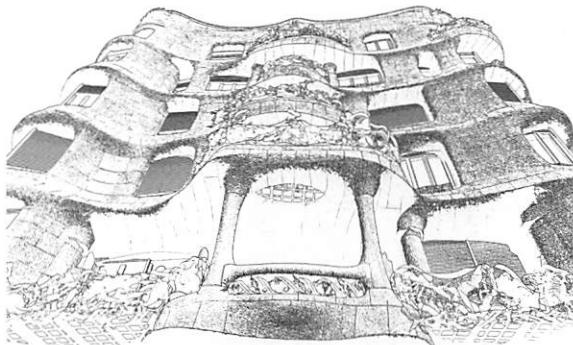


図1 高級集合住宅カサ・ミラ

5. ゲエル公園

バルセロナの富豪アウゼビ・グエルがアントニオ・ガウディの patron であったことはすでに述べた。アウゼビ・グエルは19世紀末にバルセロナの市街と地中海を見下ろす丘の斜面に15ヘクタールに及ぶ広大な土地を購入し、ガウディと共にここに「田園都市」を作る計画を立てた。当時グエルは仕事で英国にたびたび出張し、英国で盛んな「田園都市」に興味を持っていた。ここに1区画



写真14 ゲエル公園：急斜面の山肌を削らず、陸橋を作り、その下に回廊

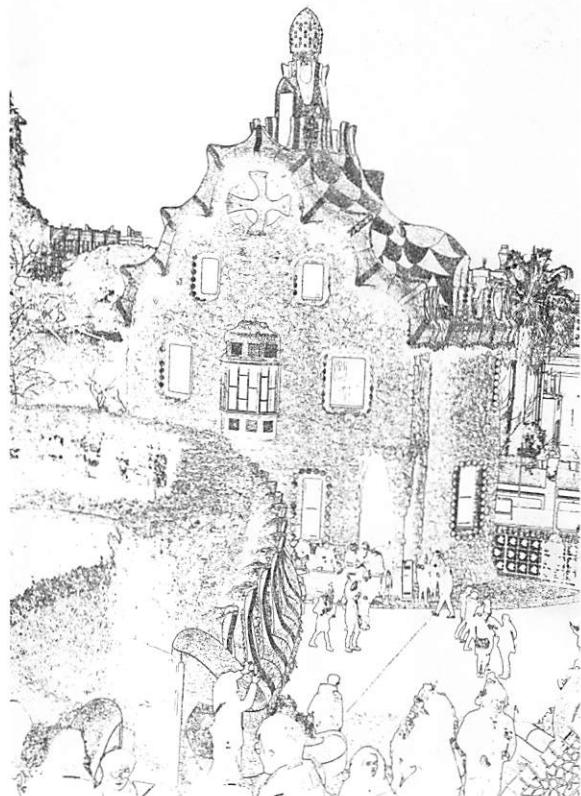


図2 ゲエル公園入口に建つ守衛所(管理棟)。現在はショップになっている

1200~1400m²で全体で60区画の分譲を試みた。しかしこの計画は失敗した。ここはグエル公園となり、傾斜地をあまり手を入れることなく造成した。地形をうまく利用し、山肌を削らず、陸橋を作り、その下に回廊(写真14)を設けることで解決した。ガウディは本来破碎してはいけない四角のタイルを破碎し、それを外壁に貼り付けることを考案した。このことにより、曲面の外壁にも



写真15 ゲエル公園：波打つ屋上のベンチとちりばめられたタイルの破碎



写真16 ゲエル公園：屋上庭園からバルセロナの町と地中海を見下ろす。



写真17 ゲエル公園：自然を崩さず作られた散歩道にある女神像

様々な色彩のタイル破碎をはめ込み自由自在なデザインを行う事に成功した。ガウディはすでにゲエル本宅の屋上煙突でもこの方法を試み成功を確信していた。ゲエル公園で集大成を行ったものである。1906年にガウディは父親、姪とともにここの住宅に越してきてている。アウゼビ・ゲエルもこの公園に引っ越し、二人はよく一緒に公園散歩を楽しんだという。

図2にゲエル公園入口に建つ守衛所を示す。写真15から写真24にゲエル公園の特徴的な景観の写真を示す。



写真18 ゲエル公園：裏山に降った雨は一旦ためられ。パイプで水槽に導かれる。散水用に使用され、一部は大蜥蜴の彫刻の口から流れ出る。



写真19 ゲエル公園：一部の水は怪獣の口から流れ出る。



写真20 ゲル公園：ちりばめられたタイルが美しい(石段の両側にある擁壁に位置する)



写真21 ゲル公園：たくさんの訪問者で賑わう石段

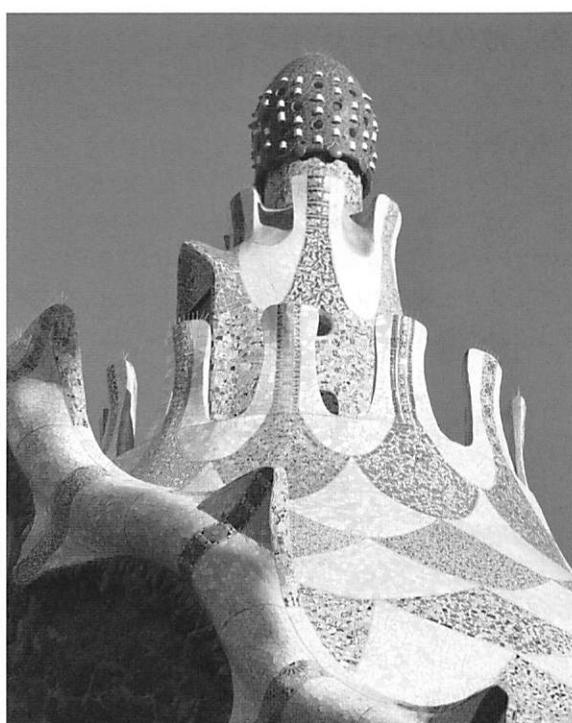


写真22 ゲル公園：守衛所(管理棟)として建てられた建物の尖塔

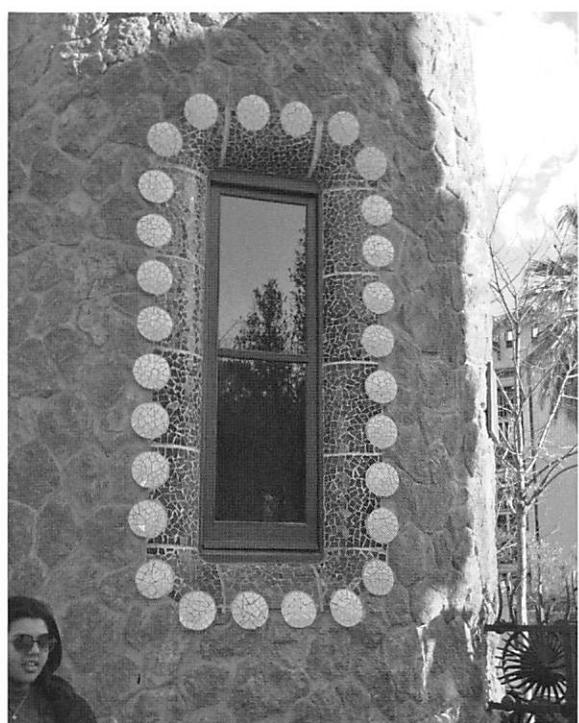


写真23 ゲル公園：守衛所(管理棟)として建てられた建物の窓

この広場は1910年から1913年にかけて作られた。ウォルト・ディズニーのテーマパークを彷彿させる。今井兼次先生はこれに強い感銘を受け、我々に(特別)講義で熱っぽく語られた。講義のあと、拍手の中を先生は白いハンカチを振って教室を後にされた事をつい先日の事のように思い出し、感傷にふけった。1910~1913年というと、ブルーノ・タウトがベルリンに田園都市ファルケンベルクやノンネンダム通りの集合住宅を作った時代である^{5)、6)}。グロピウスがヴァイマルにバウハウスを創立したのが1919年である。



写真24 ゲル公園：イスラム模様のちりばけられたタイル

6. ミース・ファン・デル・ローエによるバルセロナ万博のドイツパビリオン

バルセロナで1929年に万国博覧会が開催された。このドイツパビリオンの設計をミース・ファン・デル・ローエが引き受け近代建築の秀作といわれる作品を残した(写真25)。軒天井が外部から内部へ向けて伸びている。天井は十字形の柱で支えられている。白色の天井が内部まで、すっきりと一枚の板として入り込んでいる。単一の面を集め、幾何学的図形の集合を思わせる。内部は椅子と彫刻がおかれており、照明器具すら存在しない単純明快さである。しかしこの椅子はバルセロナの椅子と呼ばれスペイン女王にお座りいただくためにミース・ファン・デル・ローエが設計したものであった。柱も見えず、大理石の壁が自由に立っている(写真26)。ガラスも自由に立っている。これが現在世界の現代建築の主流となった「鉄とガラスの建築」の先駆的な作品である。多くの現代建築家に影響を与えた。

ミース・ファン・デル・ローエはこの作品を完成させて翌年、解任された2代目の校長ハンネス・マイアーの

後任としてバウハウスの校長に就任している。このパビリオンが建設された1929年とはブルーノ・タウトがベルリンでカール・レギエンのジードルングやオンケルトムズヒュッテのジードルングを手掛けた時代である^{5), 6)}。バルセロナというとどうしてもアントニオ・ガウディの一連の作品に注目してしまうがミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ万博ドイツパビリオンも重要な建築物である。ユネスコの世界文化遺産に登録されている。この建物のオリジナルは1929年に建設されたが、1968年に再建されている。ユーゲント・シュティールからモダニズムへの転換を示すものである。

7. カタルーニャ音楽堂

カタルーニャルネッサンスで指導的な役割を果たした合唱団オルフェオ・カタラを記念してドメイク・イ・モンタネールの設計で、1905~1908年の間に建設された。柱、天井、外壁とも装飾に富みモダニズム建築の集大成である(写真27)。音楽堂内部の階段を写真28、装飾性に富む天井を写真29に示す。階段の上にはシャンデリアが花ほころぶような形状で天井から吊るされている。



写真25 ミース・ファン・デル・ローエ設計のバルセロナ万博ドイツパビリオン



写真26 ドイツパビリオン、柱も見えずに自由に立った大理石の壁



写真27 カタルーニャ音楽堂



写真28 カタルーニャ音楽堂の階段

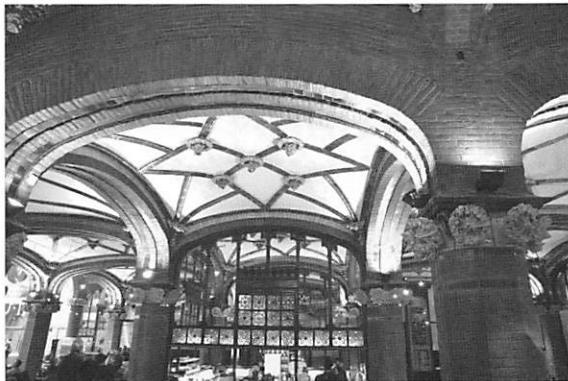


写真 29 カタルーニャ音楽堂の天井装飾

写真 31
フラメンコショー写真 32
フラメンコショー

8. バルセロナでフラメンコの鑑賞

(一社)日本断熱住宅技術協会の研修旅行は単に建築物や断熱技術に関する調査だけではなく、その土地の伝統文化、風俗などについても理解と知識を深めるように企画をしてきた。

バルセロナの伝統文化というと闘牛とフラメンコであろう。しかし闘牛は動物保護団体からの「残虐である」との抗議により最近では禁止されている。市内には闘牛場として使用されていた建物は現在ほかの用途に使用されている(写真30)。1月14日の夜はディナー付フラメンコショーの見学を行った。フラメンコはスペインアンダルシア地方に起源をもち14世紀ころから発達した民族舞踊の総称である。ジプシーがこれをさらに発展させた。歌謡をカンテフラメンコ、踊りをバイレフラメンコと呼ぶ。ギターを伴奏するのが特徴で、カスタネットを叩きながら、足を踏み鳴らして踊る。ダンサーは靴裏に金属を張り付け大きな音が出るように仕掛けである。フラメンコの小劇場でスペインワインとミックス・バエリア



写真 30 かつて闘牛場として使用されていた建物

(肉と魚介を入れたスペイン風焼き込みご飯)を楽しみつつショーを堪能した。(写真31、写真32)

おわりに

表1に示したようにスペインの国土面積は日本の1.3倍、人口は日本の37パーセントである。人口一人当たりの国民総生産も日本の方が上である。しかしバルセロナの人の生活を見ているとかなり優雅で余裕がみられる。失業率は高いものの、老後の保障もしっかりとしており、病気をしても社会保証が整っているとのことであった。現在はスペイン艦隊が世界を制覇していた時代の勢いはないが、過去の蓄積が大きいという事であろう。

〈註〉

- 所在地: 〒230-8571 横浜市鶴見区鶴見中央4-33-1
Tel. 045-501-5064 URL : <http://www.ndjk.info>
- スイスの家具メーカー、ビルスフェルデン(Birsfelden)が本社。Willi & Erika Fehlbaumにより1950年に創業され、多くの有名デザイナーの協力を得、デザインに定評がある。
- 早稲田大学建築学科昭和31年卒業、その後シカゴ美術館美術大学で学ぶ。本名は田中俊郎。日本のガウディと呼ばれ代表作はワセダエルドラド「ドラード早稲田」と呼ばれるマンションである。1983年に竣工している。所在地は東京都新宿区早稲田鶴巣町517
- 受胎告知(じゅたいこくち)はキリスト教の聖典である新約聖書に書かれているエピソードの1つ。聖告(せいこく)、処女聖マリアのお告げ、生神女福音(しょうしんじよふくいん)とも言う。一般に、処女マリアに天使のガブリエルが降り、マリアが聖霊によってイエスを身ごもることを告げ、またマリアがそれを受け入れることを告げる出来事。
- 田中辰明、「ブルーノ・タウト: 日本美を再発見した建築家」中公新書2169
- 田中辰明、「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会